

村田沙耶香『タダイマトビラ』に対する 文学倫理的批評

呂 衛 清

Understanding *Tadaima Tobira* from the Perspective of Ethical Literary Criticism

Abstract: In Sayaka Murata's novel *Tadaima Tobira*, the heroine, Ena, is trapped in a family fantasy that she imagines in order to console herself in the absence of family warmth, in particular a mother's love. In her search for an ideal family, she moves in with a college boyfriend after she starts high school. However, she soon realizes that her boyfriend is simply taking advantage of her to satisfy his own family fantasy. After tearing off the fake family veil, Ena runs to the "real home" in her heart. This essay attempts to use the approach of ethical literary criticism to connect with the novel. Through an analysis of the two main ethical lines, this essay explains how the author uses written language authority to overturn the traditional ethical concept of the family and it evaluates the post-modern family ethical concept constructed in the novel.

Keywords: Sayaka Murata, *Tadaima Tobira*, ethical literary criticism, ethical concept of the family

1. はじめに

村田沙耶香は1979年生まれの小説家、エッセイストである。2003年に『授乳』で第46回群像新文学賞を受け、2009年に『ギンイロノウタ』で第31回野間文芸新人賞を受賞する。2012年に『タダイマトビラ』で第25回三島由紀夫賞の候補入りを果たし、続く2013年に『しろいろの街の、その骨の体温の』で第26回三島由紀夫賞に輝く。また、2014年に『殺人出産』を、2015年に『消滅世界』を上梓し、「既存の倫理を揺さぶる意欲作¹⁾」を次々と世に出している。

中国でも村田は現代日本を代表する若手の女性作家として名が知られている。『星が吸う水』と『ガマズミ航海』を併録した短編小説集『星が吸う水²⁾』が2010年に中国語に翻訳され、2012年に長編小説『ハコブネ³⁾』の中国語訳

が出版されるなど、広く読まれている。許金龍は村田のエクリチュール⁴を「性愛及び社会などの諸領域における男性の支配的地位を覆した⁵」ものだと指摘している。

本稿は村田の長編小説で多くの反響を呼んでいる第25回三島由紀夫賞候補作の『タダイマトビラ』を中心に、書くという行為によって伝統的家庭倫理観を覆すと同時に、新しい家庭倫理観を構築しようという作者の実践を、文学倫理的批評の方法を駆使して明らかにしようとするものである。

文学倫理的批評は、聶珍釗をはじめとする中国の学者が欧米の倫理批評と中国の道徳批評に基づいて唱えた文芸批評の方法であり、「文学は本質的には倫理の芸術である⁶」というスローガンを掲げ、倫理的観点から文学作品にアプローチし、分析・解釈・価値判断を行う批評方法である。

まず、『タダイマトビラ』のストーリーを紹介しておこう。主人公恵奈は両親と第一人の四人家族である。家族、特に母親から愛情を得られない少女恵奈は「カゾクヨナニー」と呼ぶオナニーに夢中になり、自分の部屋で「ニナオ」と名前をつけたカーテンと戯れる自慰的行為で家族欲を自己処理している。

「カゾクヨナニー」に没頭する私とニナオは、抱擁と解放を何度も繰り返しながらだんだんと互いの温度を溶け合わせていった。私の温度がニナオに染み込み、ニナオのひんやりとした身体は私の熱っぽい肌を冷ましていく。(30頁⁷)

そして、

抱きしめられたままニナオの中でしゃがみこみ、うとうとと眠りに引きずり込まれそうになりながら、私は小さいころよく絵本で読んだお姫様たちのことを考えていた。王子様と出会って結婚するお姫様たち、絵本の最後にある、めでたしめでたし、のその先に私の「本当の家」があった。私はその家を目指してこの「仮の家」で、肉体が膨らみ大人の形に成長するまで、ただ生き延びているのだった。(31頁)

「本当の家」を求めるために、高校生に成長した恵奈は大学生である浩平との同棲生活を始める。しかし、ある日、

浩平はうっとりとして私に寄りかかる。目を閉じた浩平は、彼の理想の家族に全身を愛撫されている。私は彼の脳の中に引きずり込まれる。浩平の理想世界に従って私は彼を撫で続ける。浩平の理想世界の奴隷になって、私は彼の脳の中でゆっくりと窒息していく。

気がつくと、私はニナオになっていた。

浩平は唾液が流れ出しそうなほど恍惚として目を閉じている。その弛緩した顔は、私だった。カゾクヨナニーをしている私、そのものだった。(152 頁)

「この人、私でカゾクヨナニーをしている！」(152 頁) ことに気がついた恵奈は外へ飛び出し、「仮の家」に帰る。「だからね、皆、もういいんだよ。私たちは帰るの。家族という出来損ないのシステムが生まれる前の世界に、皆で帰っていくんだよ」(163 頁) というわけの分からない恵奈の言葉に驚かされた家族は恵奈を慰めようと思って理想の家族に豹変する。しかし、それは「三人は私の目の前でカゾクヨナニーを始めたのだった」(164 頁) と恵奈にとっては滑稽にしか映らない。

「もう苦しくないよ。カゾクというシステムの外に帰ろう」

(中略)

「おかえりなさい」

その言葉が、私たち人間が口にした、最後の意味のある言語だった。(184 頁)

恵奈がこうして「真実の世界」(172 頁)、「本当の家」のトビラへと踏み出すところで小説が終わる。一言で言えば、これは愛のない家族の中で育った少女が「理想の家族」を求め続ける家族小説である。

2、伝統的家庭倫理の崩壊

ブレイクダウン

恵奈はなぜ自分の家を「仮の家」とし、「本当の家」を求め続けるのか。それは彼女の家では倫理が崩れ、家族機能が弱まり、家族という共同体そのものが崩壊の一途を辿っているからに他ならない。

『広辞苑』によれば、家族とは、「血縁によって結ばれ生活を共にする人々の仲間で、婚姻に基づいて成立する社会構成の単位⁸」である。また、こうした倫理的共同体である家族には五つの機能が求められると言われている。具体的に言えば、性的機能・社会化機能・経済機能・情緒安定機能・福祉機能⁹である。

恵奈の父はサラリーマンで、「平日はいつも遅くに帰ってくるし、土曜は朝早くから車で出掛けて日曜の夜遅くまで帰ってこないことが多い」(24 頁)。そして、「平日の夜やたまに週末家にいるときも、ほとんど今のように書斎に

こもっている」(26頁)。恵奈が中学に上がったころからその父は平日の半分は愛人の家に泊まってくるようになった。

つまり、恵奈の父は、「結婚という制度は、その範囲内において性を許容するとともに、婚外の性を禁止する¹⁰」という倫理規範を破っている。彼が非理性的意志 (irrational will) に駆られ「夫である」という倫理的身分 (ethical identity) を放棄した結果、その家族からは「性的機能」が失われてしまったのだと言えよう。

「夫である」という倫理的身分を捨ててしまった恵奈の父は、家にいないことが多いため、親として子どもを社会に適応できる人間に躰けるといふ父親の倫理的身分も放棄してしまう。家に帰ってくるたびに、必ずと言っていいほど妻に喧嘩を仕掛け、「もっと母親らしくしてくれよ」(24頁)と責める。恵奈が浩平との同棲生活に失敗し、狂気に陥った時も、その父は「大体、高校生を外に泊めるなんて、何を考えてるんだ！お前がそうだから、こんなことになったんだろうが！」(163頁)と妻を怒鳴る。彼は子どもを教育するという倫理的責任を全て妻に委ね、父親としての義務から逃避していたのである。

一方、その妻は自分の子どもを愛せない、母親としての役割を果たせない人間である。息子啓太が遊び仲間の玩具を勝手にとりあげ、その子を殴ったため、向こうの母親が文句を言いに来た。次の一節が続く。

女性は帰っていった。弟は玄関先で固まったまま入ろうとしなかった。頭を下げていた母が、何事もなかったかのように頭をあげた。

「怒られたら、なんか疲れちゃった。あー、甘いもの食べたい」

母は嫌なことがあると、ますます声が大きくなる。(中略) 大股でダイニングへと入っていった。

怒られも慰められもしないまま放置された啓太は、白いドアが開け放たれた向こうで立ち尽くしたままだった。(8頁)

この一節を見て分かるように、母は悪いことをした啓太を叱り、子どもの中に倫理規範を作り上げ、家族の中で人間性を形成させ、社会に適応できるように教育しようとしせず、肘から血が出ている啓太の手当をして慰め、情緒を安定させようとししない。このように、この家族は家族が果たすべき性的機能だけでなく、社会化機能も情緒安定機能も果たしていない。

確かに産業化の進展に伴い、従来家族が持っていた機能が学校など専門的

な制度体に肩代わりされるなど、家族機能縮小説が叫ばれて久しい。しかし、原・金原が指摘する通り、「外部化されなかった‘愛情’は、今も昔も家族の中に欠かせないものとして根付いている部分¹¹」であり、「愛情があるからこそ家族は成立しているのである¹²」。

性的機能・社会化機能・情緒安定機能が欠落している恵奈の家族には愛情があるかという点、答えは明らかにノーである。次は恵奈の両親が交わした会話である。

「恵奈と啓太が可哀想だろう。もっと母親らしくしてくれよ」

「してるよ。あたし、毎日ご飯つくってる。洗濯も掃除もしてる」

「そういうことじゃないだろ。お前がそんなだから、俺だって家に早く帰る気をなくすんだよ」

「主婦としての仕事は全部ちゃんとこなしてるのに、何でだめなのか、ぜんぜんわかんない」

「(中略) 子育ては、仕事じゃないだろ。もっと愛情を持ってって言うんだよ」

「あるかどうかわかんないものを、与えろって言われても無理だよ」

「よくそんなことが言えるな。母親だろう」

少しの間のあと、母の声がした。

「産んだからって、どうして必ず愛さないといけないの？」(24～25頁)

恵奈の母親にとって掃除や洗濯、また子どもの世話などは全て「仕事」だった。裏返して言えば、「普通の母親からは温泉のように‘湧いて出てくる’らしい感情が、母には存在していないのだった」(20頁)とあるように、恵奈の母は生得的なもので、女性の属性と見なされる母性愛を備えていないのである。

家族を家族たらしめる夫婦の愛、子どもへの愛など倫理的な愛がない恵奈の家族は家族の絆が弱まり、ついにばらばらになる。

父は平日の半分はどこかで泊まってくるようになっていた。私も弟も、こうしてだんだんと家の外に居場所を見つけはじめのだろう。母は相変わらず家の一番奥まった場所で、黙々と家事をこなしていた。(76頁)

破綻した恵奈の家族はどこへ向かっていくのか。浩平との「理想の家族」に悲鳴をあげ、家に帰った恵奈を慰め、落ち着かせるために、家族の三人は理想の家族を演じ、「カゾクヨナニー」を始める。特に母親は「理想の母親像

と一体になれることには、セックスをしているような快感があるのかもしれない。母は（中略）実際には全身で、理想の母と一体化した自分の快樂の中に溺れていた」（167頁）。

「家族」という「自分の脳の作り上げた世界とシステムに引きずり込まれ、その幻想の中で暮らし、その幻想がどんなに苦しくてもその中で溺れてしまう」（176頁）家族の三人に「両手の自由を奪われながらも」（179頁）、恵奈はさすり続け、「本当の世界」へと帰っていく。

また、恵奈の父方の祖母は亡くなっている。「母方の祖母は生きている。だが、会った記憶は一回しかなかった」（65頁）とあるように、恵奈の家族はお年寄りなど働けない家族のメンバーを扶養・援助する福祉機能をも果たしていないことが窺える。

上述の如く、恵奈の家族は性的機能・社会化機能・経済機能・情緒安定機能・福祉機能といった五機能のうち、消費の単位としての経済機能を除いた全ての機能を喪失しているのである。故に、恵奈にとっては、自分の家は自分が「家の中にある餌を食べ」（75頁）、大人になるまで生き延びるための「仮の家」に過ぎない。この家族は家族に存在すべきとされる働きをしていない以上、脳に騙され、脳が作り上げた家族という幻想に執着する必要はないという結論が導き出される。

即ち、村田はこのテキストによって読者に、倫理的共同体であるはずの家族が家族として機能しない限り、「家族という区切りなど必要ない」（174頁）というメッセージを伝え、伝統的、或いは常識的な家庭倫理観を覆そうとしているように思われる。

3、新たな家庭倫理観の構築

村田の小説は「家族や母性を疑うものが多い¹³」と指摘されている。『タダイマトビラ』も正にそれに当たる。しかし、「文学倫理的批評の立場と最終目的は文学の倫理的価値（ethical value）を発見することにある¹⁴」と言われる通り、この小説の倫理的価値は家族の崩壊や母性の喪失を描くことにより読者に道徳的な教訓と示唆を与えると同時に、文学における伝統的な家庭倫理観を書き直し、新たな家庭倫理観を構築することである。

「温泉のように『湧いて出てくる』とされる母性が失われ、「血縁、婚姻などによって結ばれた小集団」（32頁）である家族がブレイクダウンしている

以上、「家族という出来損ないのシステム」そのものはもう存在する必要がないという作者の叫びをこのテキストの一つの倫理線 (ethical line) であるとすれば、もう一つの倫理線は「未来のドア」(105 頁) を作り、「カゾクというシステムの外に」読者を引きずっていくという作者の、書くという行為による実践であろう。

村田は第 31 回野間文芸新人賞の受賞作『ギンイロノウタ』が出版された時に受けたインタビューで、「私は人間は憎んでいませんが、世の中のシステムとか慣例とか空気を読まなければいけない空気とか、そういうのはすごく嫌で、そこからみんなを引きずり出したいという願望は強くある¹⁵」と話した。この長編では、村田は、家族愛幻想、母性神話、婚姻制度など社会や文化に規定されたシステムから読者を引きずり出そうとしていると考えられる。

まず、伝統的母性イデオロギーでは女性は妻・母として「家庭生活において彼女の本分をまっとうすることになる¹⁶」。恵奈の母はそのルールに従って家でご飯を作ったり、掃除や洗濯などをしたりするが、家族に愛情があつてやっているわけではないので、家族という「システムの義務を最低限しかこなさないようになっていた」(118 頁)。上にも触れたように、息子の啓太が遊び仲間と殴り合って血が垂れているのに、母は何事もなかったかのようにダイニングへ入り「冷蔵庫から大学芋を出してきて食べ」(10 頁)、そして「テレビから響く馬鹿笑いが部屋の空気を揺さぶ」ほど音量をあげてバラエティー番組を見始める。もう一つ例を挙げてみよう。

時間がばらばらでもいいように、おかずはいつも煮込み料理だった。家に帰るころにはいつもコンロの上に大きな鍋が準備されており、中にはシチューや煮た大根、芋など、日替わりでいろんなものが放り込まれていた。それぞれが自分で温めなおしてそれを食べるのだった。

(中略)

ある日帰ると、母はもう食事を済ませたようで、リビングのソファで眠っていた。(75 ~ 76 頁)

つまり、恵奈の母は妻・母として美味しい料理を作り一家を幸せな食卓に結束させ、家族成員に一家団欒の場・心安らぐ場を提供する倫理的責任と義務を疎かにしているのである。

このような母親失格と思われる行動は枚挙に暇がない。家族愛、特に母親からの愛が得られない啓太は家では「おもちゃか何かを壁に投げつけ」(31

頁) たり、廊下を震わせるほど大音量の音楽を流したりする。また、「学校でヒステリーのようなものを起こして暴れ」(77 頁)、放課後も「公園に隠れているか駅前のスーパーをうろついているかで」(44 頁) 家出の真似をして帰らない。弟はこうして家族、特に母を困らせることによって強い怒りと抵抗の気持ちを表出し、母から目を向けられ、「温泉のように‘湧いて出てくる’」と思われる母性愛を蘇らせようとするのであろう。

しかし、弟の啓太と引き換えに、恵奈は最初から母性愛を求めない。恵奈に言わせれば、「私たちだって、たまたまお母さんから出てきただけじゃん。だからって無理にお母さんのことを好きになる必要ないでしょう。お母さんも、私たちがたまたま自分の腹から出てきたからって、無理することないよ。そんなのって、気持ち悪いもん」(12 頁)

恵奈はなぜ弟から不満を覚えられた母に理解を示しているのか? それは、「この家で朽ち果てていく失敗者の母」(106 頁) とその「萎んでよじれた背中」(138 頁) に女性同士として同情を禁じえないからである。

「女は血を繋いでいかないとな」(50 頁) というステレオタイプに囚われ、恵奈の母はカゾクというシステムを維持するために、「血を繋いだ子を産ん」(50 頁) で、女性としての「産む機能」を果たしてきた。しかし、「女は子どもを産むから母親役割を負うのは当然で、先天的に母性感覚みたいなものが備わっているというのは、ひじょうに安易な考え方¹⁷」であると指摘されている通り、「産む性」としての生物的役割を果たした恵奈の母には「温泉のように‘湧いて出てくる’」といった社会や文化に決められた母性が備わっていない。

子どもを産み、育てるために、カゾクというシステムに縛られ家に閉じ込められた母の姿を見て、恵奈は苦しみを感している。見た目では、恵奈は出来損ないの母と対立しているようだが、本当は母に同情し、「産んだからなんて理由で、好きになんかなくても」と言って母を苦しみから解放させようとしている。

つまり、村田はこのエクリチュールによって読者を、そして苦しむ母たちを「愛情があるからこそ家族は成立しているのである」とか、母性は「普通の母親からは温泉のように‘湧いて出てくる’らしい感情」であるとかといった社会や文化に作り上げられた家族愛幻想や母性神話から引きずり出そうとしているのである。

母性がなくて子どもが愛せない母に母性を求める弟とは違い、家族愛幻想、母性神話から抜け出した恵奈は苦しみながらも、「本当の家」を求め続ける努力をする。テキストはこう記す。

弟はばかだなあ、と私は思う。ないものは作ればいいのに。こんなに簡単に自分で処理できるのに、なぜ弟は母に欲望の処理を求めるのだらうと思った。(31頁)

勿論、恵奈にも母から抱きしめられたい、家族から愛されたいという「家族欲」がある。しかし、彼女は無理矢理にそれを母に求めるのではなく、睡眠欲や食欲と同じような「家族欲」を次のように自己処理しているのである。

それを自分で処理することにチャレンジした。そして、私はとても上手にそれを始末することに成功した。私にとって‘家族欲’は、排便や排尿と大して変わらない単なる生理現象だったのだ。

性の知識が浅かった私は、食欲も睡眠欲もなんでも、欲望を自分で処理することをオナニーというのだと思っていた。だから家族欲を自己処理している自分の行為も、オナニーと呼んだ。(30頁)

つまり、弟の啓太は暴れたりして強烈な怒り・抵抗を表明し、ねじれた形で家族愛を求めようとするのに対して、カズクという「形式は壊れているから、もはや抵抗という行為の力も奪われている¹⁸⁾」と内藤千珠子が指摘する通り、恵奈は一切抵抗しない。彼女はただ「未来のドアをこれから作っていく希望に」(105頁)支えられ頑張り続ける。テキストには次のような一節がある。

家族というシステムの中で私が失敗者だとして、私はここであきらめることなどできない。そのシステムがだめなら、他のシステムを試したっていい。(155頁)

「私は‘成功’できるだろうか？‘失敗’しないだろうか？そもそも‘本当の家’とは何なのか、そんなものが本当にあるのだろうか？いびつな家で苦しみながら頑張り続けるということが‘家族’ということなのだろうか？」(139頁)と自分に問いつつも、恵奈は足を止めることなく「‘本当の家’にただ向かってひたすら進み続け」(139頁)る。

高校二年生になって、大学生浩平と一ヶ月限定の同棲生活を始めた。最初

は、恵奈は「やっぱりここが、私の‘帰る場所’だったのだ」(123頁)と思っていて、「長い長い道のりを経て、やっとドアを見つけた」(125頁) 歓喜に浸る。

「この世には、狭い暗がりから世界に向けたドアが無数にあって、私はたまたま、母の足の間についているドアを開けただけだ。この世に出てくるために蹴破った、血と肉でできた扉」(28頁)とあるように、恵奈にとって、自分の生まれた家は自分が「出てきたドア」で「仮の家」に過ぎず、浩平との幸福な家こそが「帰るためのドア」であった。

恵奈が食事を作り浩平の帰りを待つ日が続く。しかし、ある日、「恵奈は俺がいないとだめだなあ。そういうところが本当に可愛いよ。なあなあ、結婚したらさ、すぐ子供つくろう。俺達にそっくりな子」(153頁)という浩平の言葉に、恵奈は息を止められ、「玄関へ走りドアをあけ、(中略)外へ飛び出した」(153頁)。

恵奈は母のように「血を未来に運ぶためのコップ」(131頁)、つまり「産む機械」として「血に支配され」(162頁)るカゾクというシステムの奴隷になり、苦しみ、朽ち果てていきたくはないのである。家に帰った恵奈は「私たちが失敗者なわけじゃない。このシステムそのものが失敗作だったんだよ。」(162頁)と優しく母に言い諭す。

つまり、村田は第一人称である恵奈の語りによって、カゾクという失敗したシステムから女性を解放させようとしている。言い換えれば、母性神話を否定することにより母性愛にこだわらないという新たな家庭倫理を作ろうとしているように思われる。

無理に母のことを好きになる必要がない、そして無理に母に好きになってもらわなくてもいいと思いながら、恵奈は「カゾクヨナニー」と名付けた自慰的な行為により深い孤独と絶望を乗り越えていく。つまり、家族愛・母性愛を得るという家族との関わりによりエネルギーを獲得するのではなく、自分一人の力で自分にエネルギーを充電するのである。次の一節がある。

「本当の家」は私の背骨だった。そこへ向かってひたすら進み続けるということだけが、私をなんとか真っ直ぐ立たせていた。足を止めた瞬間、私は崩れ落ちてしまうだろう。(140頁)

視点を変えて見直せば、「母性愛の欠落、母性の喪失は娘を“不機嫌な娘”

私たちの笑い声は重なり合い、絡み合って、いつまでも部屋を揺らし続けた。

一見して意味のない気味悪そうな笑い声に見えるが、村田はこうした「論理の壊乱、コードの混交、意味のずれ、対話、パロディーといった、透明・中性的な科学言説から排除されるさまざまな要素を十全かつ積極的に引き受ける言語実践を示す²²」エクリチュールにより、家庭倫理に関する伝統的なイデオロギーを書き直し、新しい倫理観を構築しようと実践している。

「血縁・婚姻などによって結ばれた」家族は家族としての機能を喪失している以上、もうカゾクという区切りにこだわる必要がない。家族愛、そして「温泉のように‘湧いて出てくるらしい感情」とされる母性愛という幻想を棄て、カゾクという出来損ないのシステムから抜け出し、より広大な、より豊潤な空間に向けて飛び立たなければならない。たとえ社会の規範を破った自慰的な行為であっても、自分一人でなんとか家族欲を処理する。或いは、女性同士の絆で「すっかり安心」(61頁)できるオープンスペースを作っていく。それはそれでいいのではなかろうか。

今後の課題として、同じ血縁・婚姻制度などに代表される家庭倫理を揺さぶるものとして話題になっている村田の衝撃の新作²³『殺人出産』(2014年)・『消滅世界』(2015年)をも研究の視野に入れ、「女性が女性のために書くという女性的エクリチュールが織り成す表象²⁴」をテキストに、家族崩壊・母性喪失が問題とされているこの時代に、女性による新しい家庭倫理観や母性イデオロギーの確立を考えてゆきたい。

注・引用文献

¹ 海老沢類、村田沙耶香さん作品集『殺人出産』倫理揺さぶる奇妙な世界、

<http://www.sankei.com/life/news/140827/lif1408270013-n1.html> (本稿で参考にしたWEBページの最終アクセス日はすべて2015年11月28日である)

² 中国語訳の題名は『星辰曝露』、趙秀娟訳、金城出版社、2010年。

³ 中国語訳の題名は『方舟』、竺家榮訳、新星出版社、2012年。

⁴ 『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』では、「エクリチュール (écriture) とは文学上の概念。「書くこと」「書かれたもの」さらには「書かれた言語」などを意味する。批評家 R. バルトによると、言語 (ラング) は作家の活動する場を限定し、文体は作家の体質に内在するものであって、ともに作家の意志に無関係であるが、その中間に、作家が意識的に選択する1つの形態的実体エクリチュールがあり、それによ

て作家は彼自身になるのだとしている」。

<https://kotobank.jp/word/%E3%82%A8%E3%82%AF%E3%83%AA%E3%83%81%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%83%AB-186219> に拠る。

⁵ 許金龍. 日本文壇新生代群像図解. 村田沙耶香 (著). 趙秀娟訳. 『星辰曝露』. 金城出版社. 2010年、II頁.

⁶ 聶珍釗. 文学倫理学批評：基本理論と術語. 外国文学研究 2010年第1期、14頁.

⁷ 本稿における小説の引用は全て村田沙耶香. タダイマトビラ. 新潮社. 2012年によるものである。

⁸ 新村出 (編). 広辞苑 (第二版補訂版). 岩波書店. 1978年、416頁.

⁹ 家族機能については様々な説がある。ジョージ・マードックは性的機能・経済的機能・教育的機能・生殖的機能という四機能説を提唱したが、ウィリアム・オグバーンは家族機能を性的機能・扶養機能である「主機能」と、経済、教育、宗教、娯楽、保護、地位付与、愛情という「副機能」に分けている。本稿では日本の社会学者である野村一夫の見解に従う。詳細は <http://socius.jp/lec/15.html> をご参照ください。

¹⁰ <http://socius.jp/lec/15.html> による。

¹¹ 原真由美、金原俊輔. 現代日本の家族における「かたち」と「こころ」についての考察. 長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要 5巻1号、2007年、40頁.

¹² 同上。

¹³ 作家の読書道 第125回：村田沙耶香さん.

http://www.webdoku.jp/rensai/sakka/michi125_murata/20120516_5.html

¹⁴ 聶珍釗. 文学倫理学批評導論. 北京大学出版社. 2014年、導論7頁.

¹⁵ 吉田伸子. 家族小説に大きな一石を投じた物語.

<http://www.shinchosha.co.jp/shinkan/nami/shoseki/310072.html>

¹⁶ 福吉勝男. 家族の倫理と論理—G. W. F. ヘーゲルに関わって—. 名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究 (抜刷) 2号、2004年、14頁.

¹⁷ 青木やよひ. 母性とは何か 新しい知と科学の視点から. 金子書房. 1986年、136頁.

¹⁸ 内藤千珠子. 廃墟への依存—現代小説が描く破壊された近代. 大妻国文第43号、2012年、275頁.

¹⁹ 呂衛清. “母親”的缺位. 青年文学家総第543期、2015年、77頁.

²⁰ 王向遠. 後現代主義文化語境中的中国文学和日本文学. 国外文学 1996年第1期、104頁.

²¹ 同13。

²² 土田知則、神郡悦子、伊藤直哉. 現代文学理論 テクスト・読み・世界. 新曜社. 1997年、175頁.

²³ 市川真人は『『しろいろの街の〜』が、デビュー作の『授乳』から『ハコブネ』までの作品の影響を残しつつ物語性と描写の両面に磨きをかけた‘初期・村田沙耶香’

の10年目の集大成作だった」と指摘する。市川真人、10年後の彼女にむけて、

(<http://gunzo.kodansha.co.jp/27916/36880.html>) をご参照ください。

²⁴ 呂衛清、娘による母親殺しの文学表象に対する精神分析的考察、広島大学大学院文学研究科総合人間学講座比較日本文化学研究第8号、2015年、203頁。

参考文献：

1. 聶珍釗、文学倫理学批評導論、北京大学出版社、2014年。
2. 江藤淳、成熟と崩壊—“母”の崩壊、講談社、1993年。
3. 土田知則、神郡悦子、伊藤直哉、現代文学理論 テキスト・読み・世界、新曜社、1997年。
4. 青木やよひ、母性とは何か 新しい知と科学の視点から、金子書房、1986年。
5. 内藤千珠子、廃墟への依存—現代小説が描く破壊された近代、大妻国文第43号、2012年、265-282頁。
6. 福吉勝男、家族の倫理と論理—G. W. F. ヘーゲルに関わって—、名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究（抜刷）2号、2004年、1-16頁。
7. 原真由美、金原俊輔、現代日本の家族における「かたち」と「こころ」についての考察、長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要5巻1号、2007年、37-42頁。
8. 呂衛清、娘による母親殺しの文学表象に対する精神分析的考察、広島大学大学院文学研究科総合人間学講座比較日本文化学研究第8号、2005年、192-206頁。
9. 呂衛清、“母親”的缺位、青年文学家総第543期、2015年、76-77頁。
10. 呂衛清、“母親”的出走—品読陶麗群《母親的島》、青年文学家総第539期、2015年、8-9頁。
11. 川端裕人、家族というシステムの外へ、
<http://book.asahi.com/reviews/reviewer/2012042900010.html>
12. 小島慶子、少女が問い求める「理想の家族」、
<http://gekkan.bunshun.jp/articles/-/384>
13. 陳彦平、文学倫理学視野下の喬葉小説研究、広西大学碩士學位論文、2014。